

新潟市北区で老人憩いの家を利用する高齢者の生きがいと社会参加

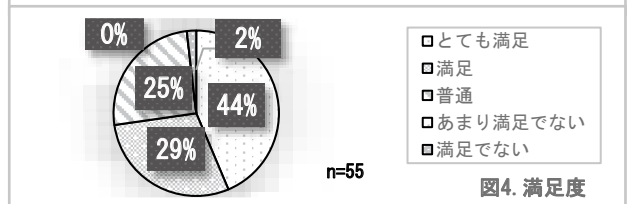
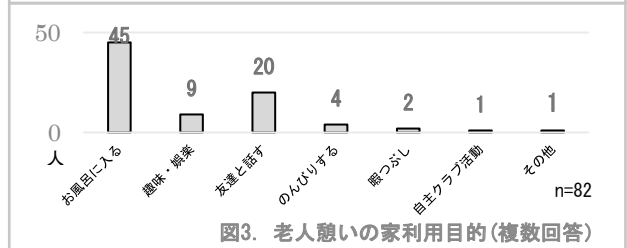
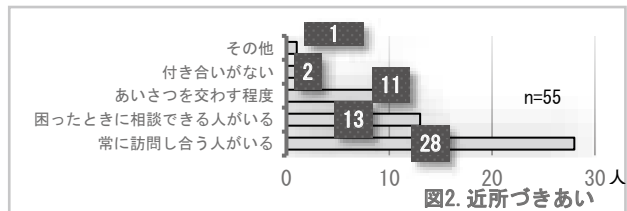
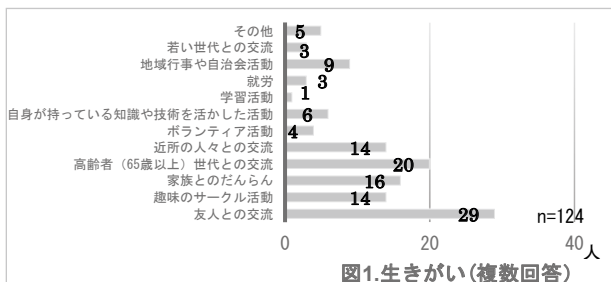
山本凌、高橋智美
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】 現在、本邦では「老後を心豊かに活力ある生活」にするということを指針とし、安心して、健康で、生きがいを実感して暮らせることを目標に施策が掲げられている。そこで活力ある高齢者像の構築を図るため、健康づくりや生きがい支援活動、介護予防策が展開されている。その結果、健康寿命が延伸し「元気高齢者」という存在を生み出している。「元気高齢者」には同世代や他の世代を支えていくという社会的役割を持ちながら、社会参加を通し地域コミュニティの担い手となることが期待されている。高齢者の生きがいと社会参加は高齢者の健康と社会秩序の維持に繋がっている。サービスを受けながらも高齢者の生きがいと社会参加は可能であり、看護学でも生きがいのある暮らしができるように専門職としてサービスを提供していくための学問体系づくりが求められている。先行研究では新潟市中央区にある老人憩いの家利用者の生きがいはあまり社会参加に繋がっていないということが明らかにされている。そこで、同じ新潟市でも地域色の異なる北区の老人憩いの家利用者を対象に生きがいと社会参加の関連性について明らかにする。

【方法】 1. 研究デザイン：記述的研究デザイン 調査研究

- 1) 調査・回収方法：自記式質問紙(属性、生きがい、老人憩いの家利用状況等)法、回収ボックスへの投函
 - 2) 分析方法：Excel 統計 2016 による単純集計
 - 3) 調査対象：北区の老人憩いの家利用者
 - 4) 調査時期：2018年8月
2. 倫理的配慮：データはすべて整理番号制として個事例が特定されないようにした。本学倫理審査を受審し承認(18062-160820)を得た。

【結果】 アンケート回収数は55件であり、有効回答率は100%であった。対象は男性が58%、女性が56%で、年代は80代が最も多かった。居住地は新潟市北区の利用者がほとんどであり新潟市東区から利用している方もいた。



生きがいは「友人との交流」が最も多く、次いで「高齢者世代との交流」であった。社会参加では「地域行事や自治会活動」「ボランティア活動」「自身が持っている知識や技術を活かした活動」「就労」の回答件数が9~3件であった(図1)。近所づきあいでは「訪問」「相談」できる人の合計が41件であった(図2)。老人憩いの家の利用目的は複数回答で「入浴」が45件と最も多く、次いで「友達と話す」が20件であった(図3)。利用頻度は「ほとんど毎日」が56.3%と最も多かった。老人憩いの家の満足度はとても「とても満足」「満足」の合計が73%であった(図4)。

【考察】 「生きがい」の中では「友人との交流」や「高齢者世代との交流」が中心となっていた。これは中央区の結果と同じであった。高齢者の多くは退職や世代交代から役割が減少し生活範囲が縮小するといわれている。そのため自ら外出する動機づけが重要であり地域性は関係ないと考える。

近所づきあいでは心配事を常に相談できる相手が中央区の32.7%とは異なり74.5%と倍以上であった。また老人憩いの家の利用目的では、「入浴」に次いで「友達と話す」が多く中央区に比べて他者との交流が盛んであった。これは北区では近所間で農作物の交換等がよく行われているという第一次産業の盛んな地域性が背景にあると考える。更に老人憩いの家の利用頻度は高く満足度も高いことから、利用すること自体が対人関係の中で間接的な社会参加となり「生きがいに」繋がっていると考える。

【結論】 本研究では、対人関係の中で「生きがい」を見出している者が多く、「社会参加」の面ではボランティア活動等が「生きがい」にあまり繋がっていないということが明らかとなった。